

3. 綴喜古墳群国史跡指定 記念シンポジウムの開催

諫早 直人・上野 あさひ・吉永 健人

1. はじめに

綴喜古墳群は、京田辺市から八幡市にかけて広がる古墳時代前期の古墳群である（京都府教育委員会 2022）。従前より大住車塚古墳（京田辺市）が単独で国史跡に指定されていたが、2021年に2基の前方後円墳と1基の前方後方墳からなる天理山古墳群（京田辺市）が「発見」されたことを契機として（京田辺市 2022）、2022年11月10日に大住車塚古墳に、天理山古墳群、飯岡車塚古墳（京田辺市）、八幡西車塚古墳（八幡市）をくわえて「綴喜古墳群」に名称変更し、国史跡に指定された。

京都府立大学と京田辺市は、2017年度より京田辺市史編さんに関わる「連携協力に関する覚書」、2022年度より「連携協力に関する協定」を締結し、考古学研究室でもここ数年、京田辺市史編さん事業に関わる調査を継続してきた。とりわけ綴喜古墳群を構成し、京田辺市域最大の前方後円墳である飯岡車塚古墳については、市が所蔵する埴輪の再整理や、東京国立博物館が所蔵する石製品の三次元計測などを実施し、古墳を評価する上での前提となる出土品の基礎資料化に努めているところである（吉永 2022、諫早ほか 2023）。そのような縁もあって、2023年3月26日に京田辺市と京都府立大学文学部歴史学科の共催で、京田辺市立中央公民館にて綴喜古墳群国史跡指定記念シンポジウムを開催したので以下に報告する。

なお、本シンポジウムは京田辺市大学連携地域貢献研究「遠く離れた京田辺の文化財をもっと身近に一市外所在京田辺市出土文化財の3D化と活用方法の模索」（研究代表：諫早直人）の成果報告も兼ねており、シンポジウム当日、会場内にて「京田辺市バーチャルミュージアム」のVR体験イベントもおこなった。その詳細については本書第Ⅲ部第2章をご参照いただきたい。（諫早直人）

2. 綴喜古墳群国史跡指定記念シンポジウムについて

(1) 企画

綴喜古墳群は前述のとおり2022年11月に新たに国指定史跡に指定された古墳群である。本シンポジウムは、国史跡の新指定を市民に広く周知するとともに、最新の文化財調査の成果を発信することによって、市民が市の歴史や遺跡に親しむ機会を創出し、文化財保護に対する理解を醸成することを目的として、連携協定を締結する京都府立大学との共催で開催した。

(2) 概要

シンポジウムは3部構成で実施した。概要は下記のとおりである。なお所属は開催当時の

ものである。

▼第1部 国指定史跡綴喜古墳群について

報告「綴喜古墳群の概要と史跡指定の経緯」上野 あさひ（京田辺市）

基調講演「綴喜古墳群から考えられること」和田 晴吾（兵庫県立考古博物館）

▼第2部 綴喜古墳群と京田辺市史編さん事業

報告1「綴喜古墳群と京田辺市史編さん事業の成果」菱田 哲郎（京都府立大学）

報告2「東京国立博物館と飯岡車塚古墳出土品」山本 亮（東京国立博物館）

報告3「飯岡車塚古墳出土石製品の3D計測とその意義」諫早 直人（京都府立大学）・

初村 武寛（元興寺文化財研究所）・二村 真司（京都大学大学院）

報告4「興戸2号墳出土家形埴輪の3D計測とその意義」

仲林 篤史（京都府立大学共同研究員）・溝口 泰久・吉永 健人（京都府立大学大学院）

▼第3部 ディスカッション

司会：諫早 直人、パネリスト：発表者、川畑 純（奈良文化財研究所）

第1部は国指定史跡綴喜古墳群について、市の担当者から古墳群の概要を報告し、基調講演として木津川左岸首長墓群調査専門家会議で委員長を務めていただいた、和田晴吾氏にご講演を賜った。第2部は「綴喜古墳群と京田辺市史編さん事業」と題し、京都府立大学が実施した市史編さん事業の成果や3D計測の結果など、最新の調査成果の発表をおこなった。また東京国立博物館が所蔵する飯岡車塚古墳出土品について、山本亮氏にご報告いただいた。第3部では、事前に参加者に配布した質問用紙をもとに、参加者からの質問に答える形でディスカッションを実施した。ディスカッションは発表者に加えて、パネリストとして綴喜古墳群の国史跡指定にご尽力いただいた、川畑純氏に登壇いただいた（写真1）。

シンポジウムは会場の都合上、定員を100名に設定したが、市内外から定員を超える応募があり、抽選により来場者を決定した。広報は本市の広報誌「ほっと京たなべ」2023年2月号に掲載のほか、市、大学、日本考古学協会と全国遺跡報告総覧のホームページにて広報をおこなった。当日は発表者、市職員に加え、京都府立大学文学部歴史学科学学生が参加し、会場設営や受付をおこなった。



写真1 シンポジウムの様子

(3) アンケート結果

来場者には配布資料とともに受付でアンケート用紙を配布した。アンケートは終了後に回収し、73名から回答を得た。アンケート項目は以下の8項目である。

問1 年代、問2 居住場所、問3 シンポジウムを知ったきっかけ、問4 参加した動機、問5 内容は期待通りか、問6 時間の長さ、問7 今後開催してほしいこと、問8 全体の感想・意見

問1の年代については、70代が35名と全体のおよそ半数を占め、次いで60代が18名、80代が8名と続いた。それに対して30代の参加者はおらず、40代も3名と参加年代に偏りがみられた。問2の居住場所については、市内在住が64名と全体の約88%を占めたが、兵庫県や奈良県、埼玉県からの参加者もみられた。問3のシンポジウムを知ったきっかけ（複数回答可）は、広報誌が63%、チラシが17%であり、市内で全戸配布している広報誌がもっとも多い結果となった。問4の参加した動機（複数回答可）については、「面白そうな内容だから」が49%、「自分の学習に役立ちそうだから」が32%であった。問5の内容は期待通りかの問いについては、「期待以上だった」「期待通りだった」「ほぼ期待通りだった」が67名で全体の約90%であった。問6のシンポジウムの時間については「やや長い」が37名と全体の53%であり、16時終了に対して15時ごろの終了が理想との声もみられた。問7の今後期待するシンポジウムの内容（自由記述）は、歴史関係（古墳、市史、史跡）の講座を期待する声が多かった。問8の全体の感想では好意的な感想のほか、音響やプロジェクター等の会場の設備については充実を求める声もみられた。

(4) 小結

今回のシンポジウムは、本市では49年ぶりとなる国指定史跡の新指定を契機に開催した。定員を設けたためすべての応募者に来場いただくことは叶わなかったが、京都府立大学の多大なる協力のもと、無事盛会に終えることができた。また開催時間や会場設備等、見直すべき部分も明確化できた。アンケートの結果からは、古墳や市史に関する講座の開催を望む声が多く、本市の歴史への関心の高さが窺えた。今後も大学機関等との連携をおこない、市の歴史に親しむ機会を創出していきたい。（上野あさひ（京田辺市市民部文化・スポーツ振興課））

3. 綴喜古墳群国史跡指定記念シンポジウムにおける学生の取り組み

本シンポジウムでは京都府立大学文学部歴史学科の文化遺産学コースの学生が中心となって、準備、運営に協力した。開催に先立って各所で配布された案内用チラシは、デザインの考案から発注に至るまでを学生が主体となっておこなった（図1）。古墳のアイコンをあしらったタイトルや、綴喜古墳群の古墳配置を表現した背景など、デザインに工夫を凝らした。なお、会場で配布された発表資料集の表紙や質問用紙なども、これらをもとに学生が作成したものである。



写真2 VR体験イベントの様子



写真3 三山木プロジェクト紹介コーナーの様子

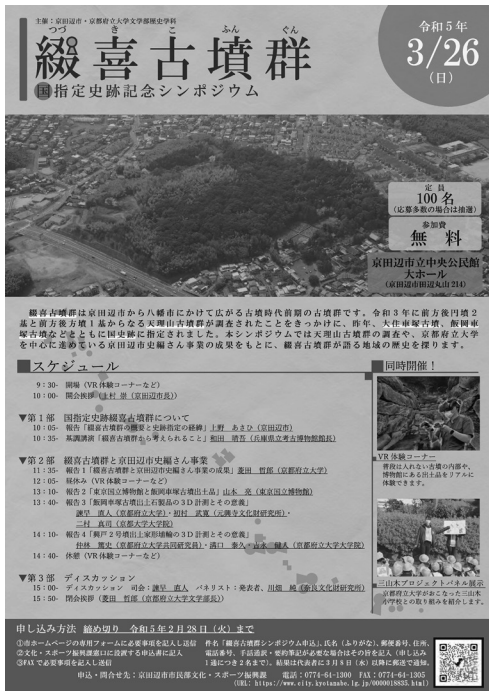


図1 学生制作によるシンポジウムチラシ

シンポジウム当日は、院生、学部生計17名が会場準備や運営に携わった。来場者受付や会場転換、カメラ撮影のほか、当日開放していた市史編さん展示室での解説など、各学生が役割を担ってスムーズな運営に努めた。また、開会前や休憩時間中に開催したVR体験イベント（本書第Ⅲ部第2章参照）では、ポスター制作から、VRで用いる機材の取り扱い、来場者への説明などに学生が携わり、行列ができるほどの人気コーナーとなった（写真2）。あわせて実施していた三山木小学校での地域学習プロジェクト（通称：三山木プロジェクト）の紹介では、実際にプロジェクトに参加した学生がパネルや遠足で使用した道具を用いながら説明をおこない、地域での大学生の取り組みを市民に伝えることができた（写真3）。

図1 学生制作によるシンポジウムチラシ

以上の取り組みを通して、文化遺産に関心のある地域住民と直接交流することができ、学生にとっても実りあるシンポジウムとなった。（吉永健人）

4. おわりに

京田辺市内には「綴喜古墳群」として国史跡に指定された5基の古墳以外にもたくさんの古墳がある。市内の古墳の重要性や市が主体となっておこなっている発掘調査、大学が主体となって進めている市史編さん事業の調査で得られた成果を、古墳に関心をもつ人に直接発信する上では今回のようなシンポジウムは有効であろうし、調査に参加した大学生が伝え手となることで地域の文化財により親しみを感じられたのではないかと考えている。市外に分散した市内古墳出土品を3D化し、バーチャル空間上で現地の古墳と紐づける試みもほかにはないものであった。ひるがえって、古墳に関心をもたない圧倒的に多くの人々に、その学術的価値や魅力を伝えるために大学は何ができるのだろうか。今後の課題としておきたい。（諫早）

参考文献

諫早直人・初村武寛・二村真司 2023 「京田辺市飯岡車塚古墳出土石製品の3Dスキャン」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第9号

京田辺市 2022 『天理山古墳群発掘調査報告書』第44集

京都府教育委員会 2022 『綴喜古墳群調査報告書』

吉永健人 2022 「京田辺市飯岡車塚古墳出土埴輪の再整理」『京都府立大学文学部歴史学科フィールド調査集報』第8号

編集後記

フィールド集報の組版作業は、歴史学科文化遺産学コースの考古・建築・地理・文化情報の合同実習メニューとして学生が Adobe 社の InDesign を利用しておこなっている。

今年度は、3年ぶりに多様な場所・フィールドで調査をおこなうことができた。調査時だけでなくその後の作業においても多くの方々からご協力を賜った。ここに改めてお礼申し上げます。

海外の調査も徐々にではあるが再開されるようになった。来年度はまた違うところに行きたいと思う今日この頃である。(き)

京都府立大学文学部歴史学科

フィールド調査集報 第10号

編集・発行 京都府立大学文学部歴史学科

〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町 1-5

発行日 2024年3月30日

印刷 株式会社 北斗プリント社

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町 38-2
